

## 試行錯誤を経て誕生した台湾の包括的引用索引データベース（特集 地域の研究成果を可視化する -- 各国データベースと評価）

著者	佐藤 幸人
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	259
ページ	24-27
発行年	2017-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00048892">http://hdl.handle.net/2344/00048892</a>

# 試行錯誤を経て誕生した 台湾の包括的引用索引データベース

佐藤 幸人

筆者は2012年、参考文献①において、社会科学と人文科学の引用索引データベース、「台湾社会科学引文索引」(Taiwan Social Sciences Citation Index: 略称TSSCI)と、「台湾人文学引文索引」(Taiwan Humanities Citation Index: 略称THCI)が、近々、統合される予定であると述べた。それが2013年9月に公開された「台湾人文及社会科学引文索引資料庫」(Taiwan Citation Index-Humanities and Social Sciences: 略称TCI-HSS)である。

本稿ではまず、TSSCIとTHCIが統合されて、人文科学と社会科学を包括するTCI-HSSへと発展することになった背景を示す。次にTCI-HSSの構築過程、その特徴と背後にある考えや思いを明らかにする。続いてTCI-HSSの使い方を説明する。最後に現在の収録および利用の状況を紹介する。

## ●TSSCIに対する反省

台湾の人文および社会科学では、1990年代後半以降、制度環境の変革が進行した。これについては既に参考文献①で論じたが、改めて補足を加えながら再論しよう(参考文献⑤も参照)。

第1の変革は、大学や研究機関、研究者に対して厳格な評価制度が導入されていったことである。研究者は研究業績によって就職、昇進・昇給、研究費の獲得が左右されるようになった。第2に、学術誌の評価制度や引用索引データベースが整備された。後者は科学技術政策を所管する行政院国家科学委員会(2014年に科技部に改組)の人文及社会科学研究発展処(2014年以降は人文及社会科学研究発展司。以下、研究発展処または研究発展司)によって進められた。研究発展処は国立台湾大学に人文学研究中心を、中央研究院に社会科学研究中心を設置し、それぞれにTHCIとTSSCIの構築を委託した。

大学・研究機関や研究者に対する評価制度の導入は多くの副作用を生んだ。社会科学において顕著だったのは、「SSCI症候群」(参考文献②)と呼ばれる研究の偏向である。評価制度では英文学術誌に掲載された論文が重視され、なかでもsocial science citation index(SSCI)に収録されている学術誌に掲載されると、高く評価された。つまり、SSCI収録誌への掲載数という外形的な基準に大きく依存するようになったのである。その反面、研究内容の評価が疎かになるとともに、他の学術誌や単行書に発表された研究、中国語および英語以外で書かれた研究が軽視されることになった。台湾の評価制度をめぐる批判的な議論は参考文献④を参照されたい。

大学・研究機関や研究者に対する評価制度は、同時に進められていた学術誌の評価制度や引用索引データベースの整備にも、大きな影響を与えることになった。中国語の研究成果を評価する際には、TSSCIに収録されているかどうかを基準として用いるようになったからである。恐らく英文誌に対するSSCIに基づく評価が、そのまま中文誌にも適用されたと考えられる。社会科学研究中心もまた、TSSCIの構築にあたって、英文誌の評価におけるSSCIの役割を踏まえ、厳格な審査を行って収録誌を選りすぐった。

しかし、TSSCIが大学・研究機関、研究者の評価に用いられることは弊害を生んだ。第1に、データベースは本来、学術誌を広範にカバーすることが望ましいが、TSSCIが厳格な審査によって収録誌を絞り込んだことによって、データベースとしての機能が損なわれることになった。収録誌は徐々に増えていったものの、厳格な審査には時間がかかり、データベースの拡大は緩慢にしか進まなかった。

第2に、研究発展処が別途行っていた学術誌の評価と、TSSCIの収録状況にはずれがあったが、大学・研

究機関や研究者の評価において、前者よりも後者が優先された。学術誌の評価では、客観的な指標と研究者に対するアンケート調査に基づき、専門家による審査を経て、4つの等級に学術誌を区分している。TSSCIの収録の審査は、それと比べてカバリッジが狭く、きめが粗く、信頼性が低かったと考えられる。それにもかかわらず、大学・研究機関および研究者の評価では、掲載誌がTSSCIに収録されているかどうか重視されてしまった。

なお、人文科学では状況はやや異なっていた。社会科学研究中心では社会科学者主導でTSSCIを構築したが、人文学研究中心においてTHCI構築の中心になったのは、図書館情報学の専門家だった。そのため、THCIはデータベースとしての機能が重視され、広く学術誌を収録するという方針がとられた。後にコア・ジャーナルの選定が必要になり、THCI-Coreが選ばれている。ただし、評価制度は人文科学にも導入されたので、それにともなう副作用は同様に生じるようになった。

TSSCIが前述のような問題を抱えていることを反省し、研究発展処はデータベースと学術誌の評価を明確に分離して、それぞれ発展を図ることにした。データベースに関しては、単にTSSCIの方針を変更し、より広範な学術誌を収録するというだけではなく、THCIと統合し、研究の学際性も視野に入れた、より大規模なデータベースを構築することになった。それがTCI-HSSである。

## ●TCI-HSSの構築過程と特徴

TCI-HSSの背景にはこうしたTSSCIに対する反省がある。しかし、それだけではない。一つはWeb of ScienceやScopusが非欧米の非英語誌にまでカバリッジを広げてきたことから、これと連携することによって、台湾の研究を世界とより密接に連結できるのではないかという期待が生まれたことである。もう一つは中国において急速に発達したデータベースに対して、対抗する必要が生まれたことである。香港やマカオの中文学術誌が、台湾のデータベースへの収録を希望していたことも、TCI-HSSの構築を後押しした（参考文献⑥）。

以下では、参考文献⑥にしたがって、TCI-HSS構築の過程を述べていく。TCI-HSSの構築にあたっては、

研究発展処に加えて、国家図書館と財団法人国家実験研究院の科技政策研究與資訊中心（以下、科技政策中心）が参画することになった。特に国家図書館はTCI-HSS構築を主導したといってもいいかもしれない。国家図書館は日本の国会図書館に相当し、「臺灣期刊論文索引系統」というジャーナル論文や雑誌記事の検索システムや、「臺灣博碩士論文知識加値系統」という博士論文、修士論文のデータベースを既に構築していた。後者には引用索引データベースとしての機能も備わっていた。これらのなかの必要なデータはTCI-HSSに組み込まれるとともに、これらのシステムがTCI-HSSのベースとなった。科技政策中心はこれら複数の検索システムやデータベースを統合するプラットフォームの作成を担当した。

国家図書館は2011年3月、教育部（教育政策を所管する）に引用索引データベース構築計画を申請し、同年7月に認められた。研究発展処、国家図書館、科技政策中心は作業グループと、図書館情報学、情報管理、人文および社会科学の専門家11名からなる諮問委員会を組織した。作業グループと諮問委員会によって、データベースのシステムの開発と引用文献データの統合が業者に委託され、2013年9月のデータベースの公開に至った。作業グループと諮問委員会は公開まで、それぞれ7回ずつ会議を開いている。

TCI-HSSには学術誌、学術書、博士論文の3種の文献の引用データが収められている。学術誌についてはレフリー制度があること、定期的に発行されていること、毎号3本以上の論文等が掲載されていることが、収録の条件となっている。今のところ2000年以降に刊行された学術誌が対象となっている。学術書には教科書、学習参考書、一般向けの読み物は含まれていない。台湾のほか、中国を除く華人の出版する学術誌や学術書も収録の対象になっている。分野は後出の表にあるように18に分けられている。

TCI-HSSはTSSCIおよびそのモデルとなったSSCIに対する反省を踏まえてつくられたことから、それを反映した特徴を持っている（参考文献③）。学術書が積極的に収録されていることはその一つである。ジャーナル論文に偏ったSSCIやTSSCIによって、研究成果として過度にジャーナル論文を重視し、学術書を軽視する傾向が生まれたからである。

もう一つの特徴は、「長期引用指数」という指標の



開発である。人文および社会科学の重要な研究は、古典として長く後世の研究に影響を与える。長期引用指数はそのような研究の性格を示す指標である。現在は試行的に167の学術誌について長期引用指数が算出されている。この指標は、特に学術書の価値を示すうえで有用だと期待されている。長期引用指数を開発した背景にある、研究の短期志向に対する批判はTCI-HSSのインパクトファクターにも反映されている。TCI-HSSのインパクトファクターは、引用の範囲が通常の2年ではなく、5年になっている。

## ●TCI-HSSの使い方

TCI-HSSのURLは<http://tci.ncl.edu.tw/>である。トップページは下のようになっている。以下、これを見ながら簡単にTCI-HSSの使い方を説明する。中国語版の説明をするが、英語にも切り替えられる。

まず、メニューは収録されたソース文献を検索できる「来源文献查詢」(図の①)、収録文献に引用されている文献を検索できる「引文查詢」(図の②)、文献の分野別のブラウズなどができる「瀏覽查詢」(図の③)、

著者を照会できる「作者權威檔」(図の④)、被引用件数やインパクトファクターなどの指標が算出できる「使用統計」(図の⑤)等から構成されている。収録文献、引用文献は、他のデータベース同様、タイトル、著者名、キーワードなどから検索できる。

収録文献については、その参考文献リストをみることができる。また、その文献の被引用件数がジャーナル論文、博士論文、学術書、学術書所収論文ごとに示され、引用している文献の情報をみることにもできる。たとえばタイトルにグローバル化を意味する「全球化」が含まれる収録文献を検索すると、886の文献が見つかる。そのうちの陳添枝「全球化與兩岸經濟關係」(『經濟論文叢刊』第31卷第3期、2003年)をみると、参考文献リストには30の文献が提示されている。一方、この論文を引用しているのは3つのジャーナル論文、3つの博士論文、1つの学術書所収論文である。

被引用文献については、それを引用している文献をみることができる。被引用文献のデータは、収録文献の参考文献リストから作成されているので、TCI-HSSには収録されていない文献も含まれている。たとえば

図1 TCI-HSSのトップページ



(出所) TCI-HSS (<http://tci.ncl.edu.tw/>) より筆者作成。

『アジア経済』はTCI-HSSには収められていないが、収録されている文献が引用しているので、その掲載論文もデータに含まれている。実際に検索すると、『アジア経済』の15の文献が、TCI-HSSの収録文献に引用されていた。

統計のページを開くと、すべての文献について年ごとの被引用件数を調べられるほか、学術誌については5年インパクトファクター、即時性指数、自己引用を除いたインパクトファクター、自己引用率、被引用半減期、引用半減期、長期引用指数といった指標をみることができる。また、研究発展司が行う前述の学術誌評価の直近の結果も提示されている。たとえば『臺灣社會學』について2014年をみると、5年インパクトファクターが0.621、即時性指数が0.077、自己引用を除いたインパクトファクターが0.545、自己引用率が0.076、被引用半減期が8.3年、引用半減期が9.6年、長期引用指数が0.279409である。

## ●TCI-HSSの収録と利用の状況

最後にTCI-HSSの現状をみておく。まず収録状況を

表1 TCI-HSSの収録状況

	学術誌	学術書
総合	211	16
文学	95	688
言語学	38	221
歴史学	48	1,018
哲学および宗教研究	48	750
人類学	24	182
教育学	115	464
心理学	16	102
法学	54	521
政治学	42	398
経済学	29	190
社会学	77	636
メディア学	13	96
地域研究および地理学	66	84
芸術学	68	407
経営学	109	96
体育学	53	29
図書館情報学	20	139
合計	1,126	6,037

(出所) TCI-HSSより作成。

みると、2017年1月現在、学術誌が合計1126、学術書が6037冊、収められている。分野別には表のようになっている。このほかに2590の博士論文が収められている。

ラフな観察ながら、この表から各分野の発表形態の傾向がわかる。歴史学と哲学・宗教研究では、研究成果の発表媒体として学術書が相対的に重要である。一方、地域研究・地理学、経営学、体育学では、学術誌の重要性が他分野よりも高くなっている。

次に利用状況を見ると、2013年9月から2016年末までの累計は、利用数が4185万、検索数が3238万、引用文献データ閲覧数が2972万であった。2016年はそれぞれ784万、441万、399万であり、3年4カ月の平均からみると、やや減少気味である。恐らく公開当初に多数のアクセスがあり、その後、落ち着いたのではないかと考えられる。今後、さらに多くの学術誌、学術書、博士論文が収められ、学術誌も号を重ねることで、またシステムの利便性も改良されていくことで、利用者は今よりも増えていくだろう。

(さとう ゆきひと／アジア経済研究所 新領域研究センター)

## 《参考文献》

- ① 佐藤幸人「台湾における研究体制の整備とコア・ジャーナル」(『アジア研ワールド・トレンド』第198号、2012年) 12～13ページ。
- ② 周祝瑛「台湾学術界におけるSSCI症候群」(石川真由美編『世界大学ランキングと知の序列化——大学評価と国際競争を問う——』京都大学学術出版会、2016年) 241～267ページ。
- ③ 陳東升「『臺灣人文及社會科學引文索引資料庫』の重要性與建置始末」(『人文與社會科學簡訊』第15巻第1期、2013年) 4～7ページ。
- ④ 反思會議工作小組編『全球化與知識生産——反思台灣學術評鑑——』台北、台灣社會研究季刊社、2005年。
- ⑤ 傅仰止「『期刊評比』與『期刊資料庫』分軌化」(『人文與社會科學簡訊』第12巻第3期、2011年) 3～11ページ。
- ⑥ 曾淑賢・鄭秀梅・羅金梅「臺灣連結世界・世界認識臺灣——『臺灣人文及社會科學引文索引資料庫』建置經驗——」(『國家圖書館館刊』中華民國102年第2期、2013年) 139～171ページ。